

観世流 緑泉会



能 經心替之型 *Keishin Keshi-gata* 津村禮次郎

能 柿山伏 *Kakigiyama-buki* 山本泰太郎

能 水無月被 *Mizunashi-harai* 新井麻衣子

能 善界白頭 *Zen Shinguhito* 鈴木 啓吾



Ryokusenkai



Kanzeryu Nob-Theatre

令和元年度 第3回例会

9.7 [土] PM 1:00 ~ (開場 12:00)

喜多六平太記念能楽堂

能 平経正 津村禮次郎

替之型

野口 琢弘

大鼓 佃 良勝
小鼓 古賀 裕己

後見 墨 敬子
鈴木 啓吾

地謡 筒井 陽子
吉留 敬高
桑田 貴志

笛 一噌 庸二
杉澤 陽子
中森 貫太
坂 真太郎

狂言 柿山伏

山伏 山本泰太郎

畑主 山本凜太郎

【休憩 十五分】

能 狂女 新井麻衣子
水無月祓 都ノ男 則久 英志

所ノ者 山本 則秀

大鼓 佃 良太郎
小鼓 大山 容子

笛 熊本俊太郎

後見 杉澤 陽子
中所 宜夫

地謡

河井 美紀
菅野 貞男
中森健之介
坂 真太郎
永島 充
佐久間二郎

【休憩 十五分】

仕舞 難波 宮

永島 充
中森 貫太

地謡

河井 美紀
佐久間二郎
中所 宜夫
坂 真太郎

能 太郎坊 桑田 貴志
善 善界坊 鈴木 啓吾

白頭

從僧 矢野 昌平
從僧 村瀬 慧
從僧 山本 則孝

大鼓 亀井 広忠
小鼓 鳥山 直也

太鼓 小寺真佐人
笛 藤田 貴寛

後見 新井麻衣子
津村禮次郎

地謡

石井 寛人
河井 美紀
坂 真太郎
中森健之介
中森 貫太
中所 宜夫
永島 充

附祝言

【終了予定 午後五時】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源から切り下す。演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場内にはご遠慮願います。場内にはご遠慮願います。場内にはご遠慮願います。

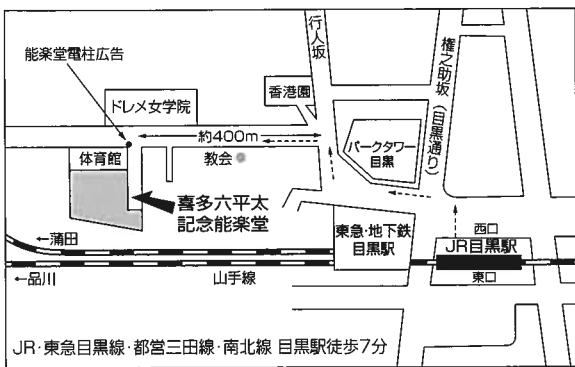
2019.9.7 [土] PMI:00 (開場12:00)

喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎4-6-9 TEL 03-3491-8813

JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。

※駐車場がございませんので、お車での来場はご遠慮下さい。



●入場料
会員券(年4回).....一般 20,000円 学生 10,000円
1回券(当日券).....一般 6,000円 学生 3,000円

●申込先: 各出演能楽師または緑泉会まで
津村禮次郎 TEL 042-386-2131 FAX 042-386-2132
新井麻衣子 TEL・FAX 04-2946-8389
鈴木 啓吾 TEL・FAX 03-3269-7018

〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
緑泉会 tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132

能——経正 替之型(つねまきかえのかた)

仁和寺は皇族が門跡となり御室御所(おむろごしよ)と呼ばれ、一大文化サロンとなっていた。その中で平経正は琵琶の名手として知られ、皇室の名器青山(せいざん)を下賜されていたが、都落ちの際に御室に立ち寄り、青山を返却した。法親王、僧行慶らと別れを惜しみ経正は西国へ下った。

経正討死の報を受け、行慶(うき)が経正を弔うために、青山を仏前に据え、管絃講(管絃の楽器により音楽を奏して死者を弔う法事)を執り行う。夜半過ぎ、燈火の陰に現れた人影(シテ)は、経正の幽霊だと答えつつ、姿は陽炎のようにゆらめいて見えない。手向けのために管絃の演奏を始めると、経正は青山の琵琶を奏でる。花鳥風月を愛でた詩歌管絃の日々を懐かしみつつ、夜遊の時を楽しむ。しかし束の間、無常への怒りが湧きおこれば、身は修羅道に墮ち、責めに苦しむ姿を恥じて、燈火を吹き消して暗闇に紛れて消え失せてゆく。

狂言——柿山伏(かきやまぶし)

修行の帰り道、のどの渇いた山伏は柿畑を見つけ、苦心の末木に登り、無断で食べ始める。それを畑主が見つけて腹を立て、木陰に隠れた山伏をなぶつてやろうと、鳥、猿、鳶に見立ててからかうのだが……

能——水無月祓(みづなきげ)

都の男(ウキ)は、かつて契りをなした室の津の女を妻に迎えるようにするが、行方知れずとなっていた。折しも夏越の祓の日。再会を願いつつ賀茂社に参詣する道中、土地の住人(間狂言)に聞くと、最近賀茂の御手洗川に、巫女姿の狂女が水無月祓の茅の輪の謂れを語り舞うのだという。待っているが、小さな茅輪を付けた麻枝を持った狂女(シテ)が現れ、男の所望に応じて夏越の祓や茅の輪くぐりの由緒を語り、面白く狂い舞う。さらに烏帽子をつけ、神の御前に舞を舞うが、やがて水に映った自分が身の浅ましさに泣き伏してしまう。男はこの狂女こそ昔契った女だと気づき、二人は賀茂の神の恵みに感謝の祈りを捧げ、連れ立って帰ってゆく。

仕舞——

難波(なむら)……かつて仁徳天皇が仁政を施した難波の春の夜。その執政であった百済国の王仁(おにおに)が現れ、春鶯囀・秋風楽・萬歳楽・青海波など様々な舞楽を表し、聖人の守り治める天下を寿ぐ。

野宮(ののみや)……六条御息所の霊は、かつて野宮を訪ねた光源氏を偲ぶ。虫の音は懐かしさを募らせ、執心は消えず、鳥居の先の彼岸へも至り得ない。御息所はまた車に乗って去ってゆく。

能——善界白頭(ぜんがいしらがしら)

唐の天狗の首領・善界坊(ぜんがい)は、自国の慢心の僧達を次々に天狗の道へ引き入れて仏教界を墮落させたが、さらに日本の仏法をも妨げようとやって来る。京都愛宕山に住む日本の天狗・太郎坊(たろう)のもとを訪れた善界坊。二人は天台宗比叡山を標的に定めることにしたが、不動明王の恐ろしい威力をしばし語り合う。そして仏道に背かなければならない運命を嘆きつつも、意を決し比叡山に向かう。中入

比叡山に仕える能力(間狂言)が登場し、勅命によって僧正が都へ急ぐ由を語る。僧正(うき)が祈禱のため京都へ向かう道中、善界坊が天狗の本性となって現れ、僧正を魔道に引き入れようとするが、僧正の祈りによって不動明王をはじめとして多くの神々が現れたため、流石の善界坊も力尽き、もう決して来ないと誓って虚空へと逃げて去ってゆく。

「白頭」という小書になると、劫を経て身に備わった凄味や威力が強調され、装束や面からも善界坊の大きな存在感が印象づけられる演出となる。

●令和元年度 第4回例会……………12月14日(土)

能……富士太鼓……………桑田 貴志
能……雲林院……………墨 敬子